

## B 5月15日（月）その18 高校生の視点での祖国復帰

昭和47年（1972年）の5月15日は、朝から雨だった。私が体験した高校生の目線で、沖縄の祖国復帰を語ってみたい。

昭和46年・1971年に彗星のごとくデビューしたのが南沙織だった。沖縄のテレビ番組に出演しているときにスカウトされ、デビュー曲の「17才」が大ヒットした。その年のレコード大賞新人賞を獲得し、紅白歌合戦にも出場した。健康的で南国的な浅黒い肌と長い黒髪と愛くるしい瞳の彼女は、小柳ルミ子、天地真理と共に「アイドル第1号」といわれた。「潮風のメロディー」、「純血」、「色づく街」、「人恋しくて」、「春の予感」などたくさんのヒット曲がある。南沙織は1978年上智大学に入学したのを機に芸能界を引退した。その後、写真家の篠山紀信と結婚し、3人の息子がいるそうです。今日の沖縄タイムスに次男でNHK「あさイチ」のレポーターをしている俳優の篠山輝信（あきのぶ）さんの講演会の様子が載っていましたね。

私は切手マニアで小学生の頃から琉球切手を集めていた。琉球切手は、昭和23年から昭和47年までに、259種類が発売された。琉球舞踊や沖縄の貝や動物、花などのシリーズものも多く、沖縄らしい鮮やかな色のものが多かった。最後の琉球切手は5¢（セント）の「ダチビン」の切手だった。4月20日の発売日に純粋な切手少年は、学校に遅刻しそうにヒヤヒヤしながら郵便局へ行ったら、投資目当ての人たちが大行列していて、うんざりした。

戦後の沖縄では1958年からアメリカドルが使われていた。1971年の「ニクソンショック」でドルの価値が急落し、「1ドル＝360円」の固定相場制から変動相場制に変わった。円がどんどん値上がりをして、このままでは通貨交換を控えた沖縄の経済は大打撃を受けることになる。そこで琉球政府は、日本政府に働きかけ県民のお金を360円換算することを保証させた。

復帰のちょっと前に突然Xデーが設定されて、県民の手持ちのドル札の確認が行われた。なんと鉛筆の頭についている消しゴムで、その紙幣にちょこんと朱肉をつけていったのだ。高校生の私は、虎の子の20ドルを確認させた覚えがある。金融機関に預けられている預貯金は、その日付けの残額が「360円保証」となった。それ以外の復帰した日に持っていたお金は、「1ドル＝305円」で交換された。私は「円」を初めて手にしたとき、おもちゃのお札であるような印象を受けた。日本の紙幣はパサパサしていて、ドルのようなしっとり感がなかった。またドルは額面によらず紙幣の大きさが同じなのに、円は額面によって紙幣の横幅が違って、変な感じがした。

45年前の今日、日本政府主催の記念式典で屋良朝苗県知事は、日本復帰を歓迎しつつも米軍基地がほとんど残るなど「必ずしも私どもの切なる希望が入れられたとはいえない」と述べた。同じ日に開催された沖縄県祖国復帰協議会の抗議集会には、雨の中、1万人の県民が参加した。

45年経っても、今なお多くの課題を抱えており、沖縄は未だ「自立発展まだ遠く、変わらぬ基地集中」（今日の琉球新報の見出し）なのである。

しかし私は、「薩摩の琉球侵略」、「農民に課せられた重税」、「琉球処分」、「他府県人による沖縄支配」、「24万人が犠牲になった沖縄戦」、「アメリカ支配」等々・・・沖縄の17世紀以降の歴史を俯瞰してみると、いろいろと課題はあったけれども、私達が生きてきた戦後の70年こそが、420年の中で一番「平和で豊かな時代」だったのではなかったのか、と考えている。

## 5月16日（火）その19 赤飯

過ぎた13日（土）は、朝から土砂降りの雨が降り沖縄地方に「梅雨入り」が宣言されました。車で移動していて、ゲットウの清楚な白い花が雨に打たれているのを2～3か所で見ました。

明日から研究員の皆さんは宿泊研修ですね。慶留間校や阿嘉校でへき地教育について理解を深め、座間味村の自然や文化、歴史にも触れてきて欲しいと思います。ちなみに座間味村と渡嘉敷村を合わせて慶良間といいます。

座間味村は復帰前から県内の観光地として有名でした。「ケラマブルー」と呼ばれるため息が出るほど美しい海、世界に誇れる珊瑚礁、色とりどりの魚たち…。阿嘉島の山や飛行場のある外地島の展望台などから感じる事ができます。ケラマジカやザトウクジラも有名ですね。

座間味島は沖縄における鰹漁の発祥に地でもあるんです。松田和三郎村長が明治34年（1901年）頃、鹿児島県の漁業関係者から技術を導入したのだそうです。鰹漁本県に大きな富をもたらしました。

さて昭和19年に、日本軍が慶良間諸島に配備された。のどかな小さな島々に突然1,000人の日本兵が来て、島々の状況は一変した。日本軍は、那覇に上陸するであろうアメリカ軍を背後から奇襲する計画だった。しかしアメリカ軍は日本軍の予想に反し、艦艇を慶良間海峡に集結させると、3月23日から慶良間に空爆や艦砲射撃を開始し、26日に座間味村、27日に渡嘉敷村に上陸した。

これから話しことはネットで検索して集めた情報です。Aさんは座間味村の出身で、戦争当時11才だったそうです。激しい艦砲射撃から逃れるため家族と命からがら逃げ込んだ壕で、集団自決に巻き込まれ姉を亡くしました。Aさんは幼い頃の体験を誰にも語りませんでした。年をとり母を亡くした頃から、気持ちに変化が現れ、「戦争体験を語り継がねば」と強く思うようになったそうです。1989年、自身の戦争体験を一冊の本にまとめました。そして毎年一冊ずつ座間味村での戦争体験記や住民からの聞き取り等をまとめ、自費出版しました。30冊近くになっていると思います。Aさんは、「戦争は親子の愛、人間の愛をも完全に消してしまう。これまで多くの人の戦争体験に触れてきたが、いかなる場面においてもむごたらしいものだ」と話していたそうです。

また同じ座間味村出身で、Bさんという方がいます。Bさんは元小学校長で退職なさった方です。おととい、ある会合でBさんから直接聞いた話を、ぜひ皆さんにも聞いて欲しいと思います。

座間味にアメリカ軍が上陸したとき、Bさんは5才だったそうです。訳も分からず母親と山中を何日も逃げ回りました。海岸に近い自然壕に身を潜めると、B少年はお腹がすいてたまらないので、「母ちゃん、ご飯が食べたい。」と言ったのだそうです。母親は、夜の闇に紛れてどこかに出かけ、しばらくすると少量のお米を持って戻ってきたそうです。そして暗闇の中でそのお米を海水で洗い、真水がないので、近くの田んぼの水を入れてご飯を炊いたのだそうです。翌朝B少年がナベのふたを開けると、赤飯が炊けていました。

水をくんだ田んぼをよく見ると、艦砲射撃などで亡くなった方々の死体から血が流れ出し、田んぼが真っ赤に染まっていたのだそうです。